江戸時代初期儒家神道研究
――東アジア思想文化の展開として――

（論文要旨）

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
中国思想文化学研究分野
学生番号：Ｄ１０４４９６
氏　　名：韋　佳

本論文は、江戸時代初期の「儒家神道」を研究課題とする。儒家神道は中世より伝承されてきた神道思想（所謂中世神道のこと）を継承し、その中に混在する仏教的要素を排除する一方で、儒教・朱子学思想を論理の基盤とする。本論文においては、儒家神道の一例として、時代的にもっとも早い林羅山の「理当心地神道」を主なる研究対象とする。

「儒家神道」に対し、儒教・朱子学的な説明が神道の本質とは距離があるとの指摘が江戸時代以来なされてきた。しかし羅山の主観においては、儒教・朱子学による神道の説明が成り立っていたとみられる。日本の近代の従来の研究は、外来思想である儒教・朱子学によっては神道を説明しきれないというように、日本をいわば中心化した視座から行われている。これに対して本筆者は、儒教・朱子学を単なる中国から来た外来の思想としてではなく、東アジアという広い地域に共有された思想とみる。この共通思想と日本の神道との交渉によって成立したのが儒家神道である。そこには東アジアの思想展開と、日本の中世から近世への文化展開の問題との両領域の問題が重なっており、この重なりのしくみを解明することが本論文の課題である。こうした視座からの研究の成果は、東アジアの他の文化交渉現象にも適用できるものと考える。

本論文は本論が五章、序章と結章をあわせて全七章からなる。序章では、理当心地神道の形成と研究すべき課題内容について論じた。その結果、一、羅山の理当心地神道の前提とする朱子学理気論に基づく「鬼神論」、二、根源神である国常立尊のあり方から見る理当心地神道の「神観念」、三、羅山における「気」の要素が一切ない「太極論」、四、理当心地神道に重視され且つ朱子学理気論が背後に支える「心」、五、神儒一致の王道論を実質とする「日本神国論」という、理当心地神道を考察する際の五つのポイントを問題として検討することとした。

第一章では、理当心地神道において林羅山が神〔カミ〕などの神道諸問題を説明する根拠となる装置としての朱子学理気論・鬼神論を検討した。朱子学鬼神論の資料を検討すると、朱熹の「鬼神〔キシン〕」論は、「鬼神」そのものを論じるための論ではなく、鬼神をも含む現象世界の万物のあり方を構造的に総合的に語るための論であることがわかる。祭祀の対象としての「鬼神」は世界の構造としての「鬼神」の一部である。鬼神祭祀は朱熹によって否定はされない。したがって朱子学理気論・鬼神論は、近代の先行研究が考えるような、鬼神の神秘性・超越性を奪う論ではない。その結果として、羅山が朱子学理気論・鬼神論によって神道の「神」を語るのは、彼からすれば神の存在を認定した上での説

明であることが判明する。

第二章において、根源神である「国常立尊〔くにとこたちのみこと〕」のあり方、そして国常立尊がいる「渾沌」という世界の元初形態について検討した。国常立尊と渾沌を語るとき、中世神道は理気論の用語を使用するが、その時点での中国思想一般情報として扱うだけで「朱子学」理気論としての正確な理解には至っていない。そのため、「一気」（気）と「太極」（理）とを混用した。この状況に対し日本の戦国時代末期に朝鮮朝ルートも含めて中国明代の朱子学が伝来することによって、抽象度が高い朱子学理気論が次の江戸時代初頭にようやく日本の儒学者に正しく理解され、それによって世界万物を説明することが可能になった。この新たな論を取り込む故、羅山は従来の中世神道の生成論的思考とは同じレベルのものではない構造論的な思考を獲得できた。儒家神道は、仏教思想を論理の基盤とする中世神道各派とは違う、朱子学理気論をその論理の基盤とする新たな神道説・神観念となりえたのである。

第三章では、羅山の「太極」論を究明した。朱子学の根幹概念である「太極」（理）について、羅山は朱熹の言葉で「無形而有理」と説明する。それに対して、国常立尊を語るときには羅山は「一而無形、虚而有霊」と言う。よく検討すると、この二つの「無形」の意味は異なる。太極の「無形」というのは、それが「気」の要素を一切もたず、そこに「形」が当然ないための表現である。一方、国常立尊が「無形」であるというのは、「渾沌」という世界の元初形態のところにこの神がおり、そこはやはり形而下の世界であるため「気」の要素があり、そこから神々が生み出され、「形」がないにもかかわらず「有〈存在者〉」として想定されるということである。すなわち、構造論における世界の根源は「太極」であり、起源論における世界の根源は「国常立尊」である。この両者について羅山は同一視していない。彼の説明は、根源神の根源性を朱子学の「太極」によって置き換えるというようなことではないとみられるのである。

第四章では、羅山が理当心地神道において「心」を重視する説き方を多くするのだが、それは何故なのか、そしてどう重視しているのかについて検討した。「心」のこの重視は、羅山が中世神道から継承し、その中に儒教の倫理道徳を入れたものと先行研究は見る。理当心地神道と中世神道とに分けて資料を考察すると、理当心地神道の「心」重視という側面は、中世神道を単に継承したものではなく、その背後に朱子学理気論があることがわから。その論によって、心の中に「実理」がそなわり、心は仏教が言うような「虚無」ではないとし、人間は自分自身の心を清く保てば、神と感じ合い、理を体得することができる

とする。仏教と融合した中世神道を脱皮しようとする意志がそこには含まれている。

第五章は、羅山の「神国」論について検討したものである。理当心地神道において羅山は日本神国論を唱え、その当時の主流であった「神国仏国論」を否定し、「神道即ち王道」という神儒一致の王道論を唱える。この王道論において、羅山は仏教・キリスト教を批判しつつ、神道を語る論理の基盤、つまり世界を説明する「普遍」的原理を儒教・朱子学に求める。羅山の主観では、中国の思想を、一般的な伝説や信仰をいう現実的なものと、世界を構成する原理論的思考法という理想的・理念的なものとの二つに分けている。彼が「普遍」的原理として使用するのは後者である。この普遍的原理に基づき、羅山は日本の「王道」を二重的に考える。すなわち、天皇は神の神勅によって日本を統治するが、自らは実際政治を行わない。一方、天皇の陪臣である将軍は天皇のかわりに「王道の政治」を行う。この二重性をもつ王道論により、羅山の神道論は、神道の神聖性と儒教の道徳性の両方を確保する論となっており、朱子学によってのみならず日本伝統の神道の側からも徳川政権の位置を基礎づけるのである。

結章は、以上をまとめつつ近世神道を東アジア思想文化の展開として捉えるべきことを論じる。

中世神道が神道世界を説明するのに都合のいい資料として中国思想を使用するのとは異なり、理当心地神道は儒教・朱子学を論理の基盤として、神道世界を構造論という新たな次元から語った。これによって形成された新たな「神」観念・神道論を研究対象として、江戸初期に流通する「神」観念・神道論との距離をはかりつつ、両者を比べながら検討することができると思う。

古代中国で誕生した儒教は、理想的な社会理念を唱える思想体系である。東アジアの地域間の文化交流にともない、この儒教思想をはじめとする中国思想が東アジア各地域において吸収され、当地の各土着文化と融和してきた。日本において、神道を語るために、『易』・老荘思想・陰陽五行説などの中国思想が多く使用されている。神道の資料を考証すると、神道家をはじめとする日本の学者たちが中国思想情報を理解するために使用した道具は、主に中国からまた朝鮮半島経由して伝わってきた書籍であることがわかる。

しかし中国思想の内容は固定不変的なものではない。そのため、各地域に伝入する中国思想情報も、時代に従って変化しつつあった。殊に南宋時代には朱子学という新たな儒教思想が誕生した。特にその理気論は、従来の儒教思想とは異なり理と気の関係によって世界万物を構造論的に説明する。この朱子学理気論は、東アジア各地域はおろか、理気論が

誕生したばかりのときの受容者である朱熹の門人やその周辺の集団たちにおいても、理解がすぐには困難なものであった。

だがその後、朱子学の世界観によって世界万物を見て、朱子学の用語で自らの生き方を語る人が南宋末以後、多く現われてきた。理と気の関係面の解釈において、一時、理を実体視して考えるかのような傾向が強くなり、それに対する警戒として、理と気との一体性を重視する明代朱子学が出現した。その明代朱子学の理気論においては、朱子学理気心性論の立場によって仏教・老荘・陸王の説などを批判する立場から、理気の関係が多く議論され、朱子学を受容する同時代の東アジアの思想家に対し、朱子学理気論を検討する重要な材料を提供することになった。

このような明代朱子学が、朝鮮半島を経由し、朝鮮で議論し形成された朝鮮朱子学と、および明代朱子学がライバル視する陽明学とともに、近世初頭の日本に伝来し横に並んだ。すなわち、羅山の時代においては、それまでの日本の中世には読まれることがあり得ない明中期頃以降の資料が日本で見られているのである。

陽明心学と対抗するために理気の関係に関わる説明を拡大させた、理気論に向う朱子学である中国明代朱子学の説は、羅山がいる日本の近世初期という時代においては、言うまでもなく最先端の学問である。この新たに更新された理気論を理解し、日本の儒学者は朱子学の思考を用いて世界万物を構造的に考えることが初めてできるようになった。

こうした中国思想情報の質的転換とその理解は、東アジア各国の文化・社会のさまざまな面において、受容と変容をもたらした。儒教・朱子学によって神道を解説する儒家神道はまさに、江戸時代初期の日本におけるこの展開・融和の産物である。「儒家神道」に対する研究を切り口として、中国を中心化するのでもなく日本を中心化するのでもなく、東アジア諸社会における思想・文化の展開と交渉を考察することを、本研究の今後の課題としたい。